



新家族

富岡多恵子

白選短篇集

新家族

江苏工业学院图书馆
藏书章

自選短篇集

學藝書林



富岡多恵子（とみおか たえこ）

一九三五年、大阪に生まれる。処女詩集『返禮』で第八回日氏賞受賞。長篇詩『物語の明くる日』で室生犀星賞を受賞する。その後小説に転じ、『丘に向ってひとは並ぶ』で注目を受け、以降、『植物祭』で田村俊子賞、『冥途の家族』で女流文学賞を受賞する。代表作に『波うつ土地』『白光』などがある。評論には『近松浄瑠璃私考』『藤の衣に麻の衾』『こんな時代の小説』など多数。

新家族

— 富岡多恵子自選短篇集 —

一九九〇年二月二十日 初版発行

著 者 富岡多恵子

発行者 和田員枝

装 幀 中島かほる

印刷・製本 東洋印刷株式会社

発行所 株式会社 學藝書林

東京都中央区八丁堀二一三—五

電話 〇三（五五二）五九〇六（代）

振替口座（東京）三一—〇八二—

定価はカバー・帯に表示しております。
乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

新家族	3
末黒野 ^{+くるの}	21
名前	45
多摩川	71
女道楽	93
はつむかし	115
遠い空	143
坂の上の闇	181
環の世界	219
あとがき	269

装
画

杉
本
典
已

新
家
族

動物園の売店で、紙コップに入ったコーヒーと、紙袋につめこまれたジャガイモの揚げたのを買ったら、両方で四百五十円だった。コーヒーは熱く、ままごとの食器のような小さな入れもののミルクと、砂糖とスプーンがついていた。ジャガイモも揚げたてで、熱くておいしかった。ジャガイモの上に、かすかに塩がふってあり、紙袋にはフレンチ・フライと書いてあった。

売店で飲みものや食べものを買うのには、かなり待たなければならなかった。窓口は三つもあるのに、それぞれに、ひとが二十人ずつくらい並んでいるのである。しかも、ひとりがコーヒーならコーヒーを一杯買うのではなく、コーヒー六杯に、フレンチ・フライを六ツ、ハンバーガーを三ツ、割りばしをつきさしてテンプラのころものようなものをつけて揚げたソーセージを二本というように、どっさりと買いこむので列が前へ進まないのだ。見ている

と、たかがジャガイモとはいえないくらいにみんなお金を払っている。ひとりで数千円も払っている。ジャガイモの入った袋は、十センチ四方くらいの小さなもので、そこにこぼれんばかりに拍子木に切ったジャガイモが入っているけれども、もともと袋が小さいのだから、オトナが食べるとすぐになくなってしまふ量なのだ。

買ったものを、売店の前におかれたベンチに坐ってひとびとは飲みかつ食べている。ベンチの前にある丸太でつくったテーブルの上に、買ったものを並べて、家族が食べている。ふた親と子供ふたりで、それぞれがなにかを飲み、なにかを食べるだけで、二、三千円は飛んでしまふだろう。それで、腹の足しになるというわけではない。かれらは、動物園を出たら、多分、もう一度帰るまでの一時しのぎにラーメンを食べるか、一家で食べもの屋へ入って夕食をするにちがいない。たいへんな費用だ。

それにしても、二ツのことでわたしはしきりに後悔していた。まず、「子供の日に動物園にきたこと、もうひとつは、すこし前に新聞の地方版の記事に出ていた子供のイノシシが、その時の写真より大きくなりすぎていたことであった。イノシシの赤ん坊は、胴体に縦縞があるのだった。その縞が、すこし大きくなると消えてなくなってしまう。わたしは縞模様の

子イノシシを見たくてやってきたのに、イノシシの子供にはもう縞がなくなり、泥の色をしてねむっていた。イノシシの親たちは、泥まみれでねむっていて、文字通り石のように動かなかった。どうやら、泥水の中からだをこすりつけるらしかった。泥で毛についているムシを殺すのかもしれない。イノシシのからだには泥がこびりつき、泥が乾燥して固っていた。子供に泥はついていなかったが泥の色の毛でねむっていた。へああ、もう縞がなくなっている」とわたしは柵から身を乗り出してひとりごとをいったが、勿論だれも答えるひとはいなかった。

イノシシの縞を見られなかったことよりも、「子供の日」にきたことの方がくやまれた。なんととっても、人間の子供が多すぎるのだった。しかし、五月のはじめの、飛び石連休といっても、わたしには「子供の日」しか休みはなかった。

動物園では春に生れた赤ん坊や子供がふえていた。その動物を見にきている人間も、小さな子供づればかりだった。子供のいない若いふたりづれもいるが、わたしのようにひとりで歩いている人間は見かけない。

その動物園は、広い丘陵を利用した自然公園のようになっており、動物たちは檻に入って

おらず、動物が飛び越えられぬ溝をつくったりして、土地の起伏をうまく生かして動物がなるべく動きまわれるように工夫されていた。ライオン二十数頭も、人間は人工的につくった崖の上から見られるのだった。

「ゴリラやチンパンジーのオスはものを投げたりすると興奮して、ものを投げ返しますから、絶対に食べものを投げないで下さい」という注意が、何度もうり返してチンパンジーの領土のそばのスピーカーから聞えていた。「食べものをやらないで下さい」という立て札もあちこちに立っている。

小さな男の子を肩車にしていた若い男が、なにか小さなものをチンパンジーに向かって投げた。チンパンジーの領土と人間の土地との間には、三メートルくらいの溝があった。若い男の投げた食べものは小さくて軽すぎたために溝の中に落ちた。

「なあんだ、パパ」と小さい男の子がいった。

「へようし、待ってろよ」と若い父親は子供を肩からおろし、そばにいる女（多分その男の妻で、子供の母親）のもっている手さげ袋から食べものをつかみ出した。

その男は、菓子パンをちぎって投げた。それも溝に落ちてしまった。次に、子供の食べ残

しらしいトウモロコシを投げた。それはチンパンジの領土にとどいた。子供は大声をあげてはしゃぎ出した。

「へびっくりしてるわよ、ほら、あの顔」と子供の若い母親は大声で笑った。

まわりにいるたくさん家族づれからも、笑い声が上がった。他のだれかれも、チンパンジの領土に向つてものを投げはじめた。だれも、チンパンジに命中させようとして投げているわけでなかった。しかし、時には思わず、チンパンジのすぐそばにモノが落ちることがあった。もうだれにも、スピーカーがくり返している注意のことばは聞えていなかった。

その時、だれかがキャッと叫んだ。突然、チンパンジの反撃がはじまったのだった。いちばん大きいチンパンジが、人間がものを投げるのと同じ恰好でモノを投げてくるのである。かれらの領土には投げるに適当な小石はない。かれらの領土は、セメントでつくられた人工の山や谷があり、鉄パイプでつくったブランコのようなものがある。人間の使う自動車のクルマのタイヤもある。他にはなにもない。人間の投げた食べものは、領土内に散乱している。しかし、かれらは、人間の家族の群に向つてモノを次々に投げてくるのである。モノ

の正体はわからないが、とにかく固いモノが飛んでくる。もう一頭も立ち上り、アンダー・スローでモノを投げ出した。人間が逃げまどい、声をあげると、かれらはますます興奮するの、その投げぶりに力が入る。剛球あり、速球あり、カーブあり、フォーク・ボールありの、華麗な力投がふたりの投手からつづけられるのだ。

わたしは二十歳すぎたころ、結婚に反感をもっていた。オトナが、若い人間、ことに女を見ると結婚させるのが無難という態度をとることへの反感もあった。それにその時はまだ、結婚によって生れる家族というものがあまり現実感をもたなくて想像できないのだった。それでも、オヤの強いすすめで一度だけ見合いをしたのだった。その時わたしは二十二歳だった。

相手のひとは、すでに結婚や家族のことを現実的に想像しうる年齢と生活体験のあるひとであった。したがって、そのひとのハナシは現実的であった。そのひとは、そのひと自身のもっている結婚や家族への現実的な想像の中にわたしをおいて見ていた。それがそのハナシからよく読みとれた。わたしには、家族というのはまだマボロシにもなってくれない、想像さえできぬものであった。わたしはそのころ自分自身さえどうしていいか、どうなるのかわ

からないのだった。

「母親もいっしょに住むことになるのですが」と相手のひとはいった。

そのひとの母親は、わたしの母親をいれて四人で昼食したあと帰っていった。五十代のなかばくらいに見える、知的な女性であった。母親たちが帰って、男女ふたりになって喋っている、わたしは自分のおかれている状況がきわめてワイセツであるのに気づき、落着きを失っていた。わたしはそのため、ほとんど顔を上げられず、下ばかり向いていた。その時から二十年、わたしは一度も自分の家族をもたずに暮してきた。もう、家族のない毎日に慣れていた。そして、若い男女が見合いをした話を聞いてもワイセツに思わなくなっていた。弱いオスのチンパンジは、群のなかで喧嘩が起ると、メスから赤ん坊をひたたくて抱きしめる。赤ん坊を抱きしめると、他のオスから攻撃されないものである。その様子がおかしくて、チンパンジの記録映画を見た時何度も笑ったことがある。

もうチンパンジは、モノを投げるのをやめていた。かれらは、人間の真似をしたのかもしれないとわたしは思っていた。

広い丘陵の中の動物園にいる動物たちはみんな家族で暮していた。一夫一婦もあり、一夫

多妻もあり、一婦多夫もあった。その多くは、春に生れた赤ん坊を加えた新家族だった。その新家族を眺めているのも、赤ん坊か幼児をつれた人間の新家族だった。都会から離れた丘陵地帯の空は快晴で澄んでいた。広い丘陵地帯は、動物と人間の新しい家族で埋っていた。オヤは若く、子供は幼なかった。人間の発する声は澄んだ空気の中でぶつかり合い、おたがいをはねとばすくらいに、勢があった。人間のオヤは、動物を見てよろこぶ子供の表情を眺めながら、ひと時の幸福に酔うのだった。動物もまた、人間のよろこぶ顔を見て、新家族の幸福に酔っているにちがいない。動物は人間に見られて疲れているだろうか。たしかに疲れるだろう。しかし、向うだってこちらを見ているはずだ。いやもう、動物も人間も、同じ領地にいるのだ。その間に溝や柵はないのだ。人間が三メートル、五メートルの溝を飛びこえて、ライオンや虎のところへ遊びにいてもいいのだ。みんなそれぞれに、こんなに幸福なのだから。

ところが、ライオンの広い領地へは、人間は小型のバスに乗って入っていくのである。白いバスの車体には、黒いペンキで迷彩模様が描いてある。ライオンの領地には、自然の森もあり、池もあり、丘もあるが、その間を、人間のバスが通るアスファルトの白い道がくねく

ねと走っている。バスの座席はみんな外側に向って人間が坐るようにつくつてある。窓は大きく、分厚いガラスが腰の下あたりまでであるので外のライオンがよく見えるのである。

昼寝を邪魔されたライオンは、時折とまるバスの窓に向って、かけのぼるように立ち上ってかぶさってることがある。

「へコワイ！」と幼い子供は叫び、またよろこぶ。

「へすぐく大きなお口ね。あれでパクリとやられると死んじゃうわよね」と若い母親が子供に喋っている。

ライオンは前肢でガラスをたたく。バスの中の人間は総立ちでライオンに向って吠えはじめた。ライオンも、ひと声吠えた。その咆哮はさすがに人間が束たばになってもかなわぬものだった。地響きのような声は、ライオンの広い領地の、コンクリートの壁にこだまし、さらにそれは空に舞いあがり丘陵地帯全体に音の波となつてうねりながらひろがっていった。まさしく、ケモノの声だ。樹木の下で、二頭か三頭ずつライオンは寝そべっている。オスとメスもあり、オスばかり数頭のグループもある。バスの道を二頭がつれだつて横切っていくこともある。ライオンのオスは働かないということだ。働きのいいメスが数頭のオスを養うと

いうことだ。もつとも動物学の本でたしかめたわけではないけれども、そんなハナシをだれかに聞いたことがある。ライオンのオスの首のまわりのフサフサした毛は、あれは喧嘩で首に噛みつかれた時の防禦のためだと聞いたこともある。はたしてそうなのだろうか。人間の男の長髪も、首筋を噛みつかれるのを守るためなのだろうか。

わたしはライオンの、あのフサフサの毛を犬を撫でるように撫でてみたいとしきりに思っていた。犬と遊ぶように、ライオンの子供と遊びたい。ライオンはすぐそばにいる。なぜ、バスを降りて、ライオンたちのところへ歩いていってはいけないのだろうか。食べられてしまふからか。かれらのテリトリーへ侵入すれば攻撃されるのは当然だろうが、すでに、バスという堅牢な鎧を着て侵入しているではないか。ライオンはチンパンジーのように、人間にモノを投げつけはしない。ほとんどはバスが通るのに無関心である。バスの窓ガラスにかぶさってくるのは、余程機嫌の悪いライオンなのだろう。

バスの乗り場には、歴代のバスの写真が貼ってあった。バスの地位をめぐる苛烈な争いで傷ついたライオンの写真もあった。二十数頭には幾組かの家族がいるのだろう。その幾組かの家族の上にバスがいるのであろう。バスはオスであるが、その争いの本能を野性というの

だろうか。わたしの野性とはなんなのだろうか。ライオンと、犬とたわむれるようにして遊びたいと思うところが野性なのだろうか。なぜ、わたしが、バスから降りて、ライオンとたわむれることは許されないのだろうか。なぜわたしが、ライオンに食べられてはいけなのだろうか。わたしがライオンを食べるかもしれないじゃないか。あのオスの首筋の深い毛並み。争いの時にはあの毛が天に向ってそそり立つのかもしれない。

あのころ、若いメスの私は発情していた。それなのに結婚しなかった。見合いをした相手は冷静な人間の男性だった。発情したメスのわたしは、発情したオスとはしばしば結合していた。アイシテルワ、アイシテルワとわたしはいい、アイシテルヨ、アイシテルヨと発情したオスはいうのだった。ふたりは手をつなぎ、腕を組み、抱き合い、髪の毛をいじくり合っていた。仲のいい猿がシラミをとり合うように、いつもどこかをさわり合っていた。さもないければ、電話で喋っていた。コトバでどこかをさわるのだった。猿の毛づくろい（グルーミング）と同じことだった。しかし、メスが子供を^{はら}むと、オスはどこかへいってしまいうのだった。そこが動物とちがうところだった。メスは子供を殺すことで発情の後始末をしたのだった。